第27回

金春康之演能会

かつての女人を偲ばせる
杜若の花・・・
女の姿で現れた杜若の精が
業平の冠と高子の衣を身に着け
業平の恋物語を語り
舞を舞う・・・
金春禅竹の見た
美しい夢は
今も生きつづける

仕舞　嵐山　本田芳樹
仕舞　田村（クセ）　佐藤俊之
仕舞　熊野（キリ）　金春安明
仕舞　通小町　櫻間金記
仕舞　鞍馬天狗　金春穂高

狂言　因幡堂　善竹彌五郎　善竹隆平

能　杜若（かきつばた）　金春康之　ほか

二〇二一年三月二十八日（日）
午後二時～五時

●全席指定＝正　面　五五〇〇円　脇正面　四五〇〇円
中正面　三五〇〇円　学　生　二五〇〇円
●入場券発売＝二〇二一年一月二十二日（金）から
●お問い合わせ＝金春康之後援会事務局（10時～17時）
TEL／FAX　〇七四三―五六―三一六九

奈良春日野国際フォーラム甍

主催　金春康之後援会・桃心会
後援　奈良県
奈良市文化芸術活動臨時支援事業
関西元気文化圏参加事業

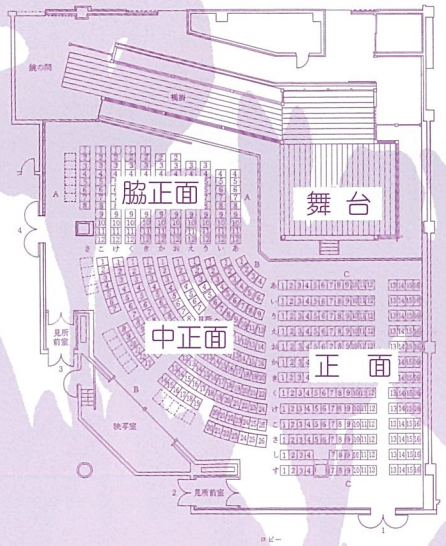
能《杜若》について

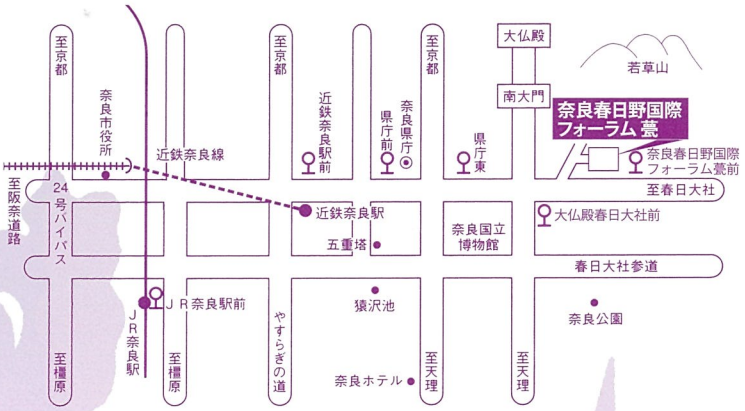
「植え置きし昔の宿の杜若色ばかりこそ形見なりけれ」（かつて共に暮らした家に植えておいた杜若の花が咲き、その色だけがあの人を偲ぶ形見であることよ）という歌によって、杜若は人を偲ぶ形見とも見られていました。また、「昔男」の多くの恋を語る『伊勢物語』は、中世には、在原業平のことを物語に変えたものとして解釈されていました。能〈杜若〉の作者と考えられている金春禅竹は、先の歌の杜若を、業平の恋人であった二条の后・高子を偲ぶ形見のようにあつかいながら、杜若の咲き乱れる三河の国八橋の沢辺に、杜若の精として女人を登場させます。女は杜若の精でありながら、いつも高子を感じさせるのです。そして、不思議なことに、女は業平の冠と高子の衣を身に着け、『伊勢物語』にしたがって業平の恋物語を語り、舞を舞います。それは業平が高子の衣をまとっているようでもあり、高子が業平の冠を着けているようでもあります。濃密な恋の姿ですが、業平は衆生済度のために現れた歌舞の菩薩の化身とされており、女はあくまでも杜若の精として成仏し、魂の世界に帰りますので、能〈杜若〉は、初夏の夜明けの爽やかな光につつまれて清浄な余韻を残す詩劇となっています。金春禅竹が観た高雅な夢なのでしょう。

金春康之プロフィール

一九五〇年広島生まれ。シテ方金春流第七十九世宗家金春信高師のすすめで奈良に転居し、七歳で金春欣三師に師事。京都大学、大学院を通じてハイデッガーの哲学のなかにある芸術思想を研究し、奈良県立美術館の学芸員を勤めていたが、一九九九年に退職し、能に専念。二〇〇一年、重要無形文化財能楽総合保持者に認定。

能楽ホール　座席図





＊本公演は新型コロナウイルス感染予防ガイドラインにしたがって行います。
＊入場者数は会場定員の半数の250名に制限します。
＊マスクの常時着用、検温、手指のアルコール消毒にご協力をお願いします。
＊会場の換気は十分に行われていることを施設に確認しています。
＊当日の演目、出演者に変更がある場合があります。あらかじめご了承ください。